

## 【調整作業】

- 送信機のモードをAM、FM、CWなどの調整に使用できるモードに合わせて送信する。このとき、前面パネル①の進行波メータは送信電力を指示しますが、前面パネル②のSWRメータは動きません。  
(注意) 調整する場合、搬送波が出力されるモード(AM、FM、CWなど)で送信します。SSBでは、音声入力が無いと電波が出ないので調整できません。
- CALツマミ(前面パネル⑦)を引き出して時計方向に回します。SWRメータの指針が最大点(CALと印刷された位置)になるように合わせます。その位置でツマミを押し込めば、指針は使用中のアンテナのSWR値を指示します。(この状態で、アンテナ本体のSWR値が測定できました。)

## 【チューナによるSWRの改善】

- 送信を停止して、チューナ・スイッチをTUNER-ONにします。
- CALツマミを回して最小位置に戻します。
- 送信機を送信します。
- CALツマミを引き出して、時計方向に回しながら指針をSWRメータのCAL点に合わせます。この設定ができれば、CALツマミを押し込みます。(まだチューナが調整されていないので、SWR値はあまり下がらない)
- マッチングツマミ(前面パネル③、④)を回して、SWRメータの指針が最も下がる点を探します。SWR ≒ 1:1(メータの1の点)で調整が完了です。このとき前面パネル①のメータは、送信電力(進行波電力)を指示しています。
- 送信を一時停止して、運用するモードに送信機のモードを設定してから実際の運用に入ってください。

## ファジーマッチによる使用方法

多バンド複合タイプのアンテナや短縮率の高いアンテナの場合、便利な反面に欠点もあります。複合多バンド形アンテナの場合は、ある周波数だけマッチングが悪いときなどはどうにもなりません。また高短縮率形アンテナでは、バンド内であってもSWR値の良い点がとても狭くてバンドエッジでは運用できないことも

あります。このようなときは、NT-636のファジーマッチ機能(3.5~5.4MHz対応)を使用して調整します。

## 【ファジーマッチによる調整手順】

- 送信機の出力を10W位まで下げる。
- マッチングツマミ(前面パネル③、④)を基準調整点の近くに合わせる。
- 送信しながらCALツマミを引き出して、SWRメータの指針をCAL点に合わせる。設定ができた状態でCALツマミを押し込めばSWR値を指示する。(当然、マッチングツマミでの調整前であるからSWR値は良くない。)
- このままバンドスイッチ(前面パネル⑩)を回して、SWR値が少しでも良くなる点(バンドスイッチの位置)を探す。
- バンドスイッチの位置が設定できたら、マッチングツマミを回してSWR ≒ 1:1になるように調整する。
- 10W位での調整が完了したら、送信電力を順次上げながらマッチングツマミを回して整合を取り、SWR値を確認しながら実際の運用をしてください。  
(このときバンドスイッチは、動かさない。)
- \* アンテナのリアクタンス成分が誘導性か(L成分)容量性か(C成分)によって、バンドスイッチの位置を変えてマッチングさせているので、調整のしかたで接点位置が変わります

## 【ファジーマッチによるバンドスイッチの可変範囲】

ファジーマッチによるバンドスイッチの可変範囲は、下記を参考にしてください。

記

運用周波数	バンドスイッチの位置
3.5MHz	B, C, D
7.0MHz	D, E, F
10~21MHz	F, G, H
21~30MHz	I, J, K
50MHz	K, L

表の範囲内でSWRが改善されない場合は、アンテナ本体が運用周波数において不適当であることとなります。